

晚年

晚

年

太

宰

治

精選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年 4 月20日 印刷

昭和55年 5 月 1 日 発行

(第11刷)

太宰 治著

晩 年

砂子屋書房版

刊 行	財団法人 日本近代文学館 東京都目黒区駒場 4-3-55 代表者 小 田 切 進
編 集	名著複刻全集編集委員会 代表者 稲 垣 達 郎
総発売元	株式会社 ほ る ぶ 東京都新宿区新宿 2-19-13 代表者 中 森 蒔 人
製 作	株式会社 ほるぶ出版 東京連合印刷株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

雀 猿 地 列 魚 思 葉

ケ 球 服 ひ

目

こ 島 圖 車 記 出

..... 六

..... 九

..... 二

..... 七

..... 九

..... 七

..... 二

次

めく ら 草 紙	陰 火	玩 具	ロ マ ネ ス ク	彼は昔の彼ならず	逆 行	猿 面 冠 者	道 化 の 華
.....三三	二七	二二	一九	一五	一四	二七	一八

晚

年

葉

撰ばれてあることの

恍惚と不安と

二つわれにあり

ヴェルレエヌ

死なうと思つてゐた。ことしの正月、よそから着物を一反もらつた。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞目が織りこめられてゐた。これは夏に着る着物であらう。夏まで生きてゐようと思つた。

ノラもまた考へた。廊下へ出てうしろの扉をばたんとしめたときに考へた。歸らうかしら。

私がわるいことをしないで歸つたら、妻は笑顔をもつて迎へた。

その日その日を引きずられて暮してゐるだけであつた。下宿屋で、たつた獨りして酒を飲み、獨りで酔ひ、さうしてそこそ蒲團を延べて寝る夜はことにつらかつた。夢をさへ見なかつた。疲れ切つてゐた。何をするにも物憂かつた。「汲み取り便所は如何に改善すべきか？」といふ書物を買つて來て本氣に研究したこともあつた。彼はその當時、從來の人糞の處置には可成まゐつてゐた。

新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊いしころがのろろ這つて歩いてゐるのを見たのだ。石が這つて歩いてゐるな。たださう思つてゐた。しかし、その石塊は彼のまへを歩いてゐる薄汚い子供が、糸で結んで引摺つてゐるのだといふことが直ぐに判つた。

子供に欺かれたのが淋しいのではない。そんな天變地異をも平氣で受け入れ得た彼自身の自棄やすが淋しかつたのだ。

そんなら自分は、一生涯こんな憂鬱と戦ひ、さうして死んで行くといふことに成るんだな、と思へばおのが身がいぢらしくもあつた。青い稲田が一時にぼつと霞んだ。泣いたのだ。彼は狼狽ろうたいへだした。こんな安價な殉情的な事柄に涙を流したのが少し恥かしかつたのだ。

電車から降りるとき兄は笑うた。

「莫迦にしようてるな。おい、元氣を出せよ。」

さうして龍の小さな肩を扇子でポンと叩いた。夕闇のなかでその扇子が恐ろしいほど白つぽかつた。龍は頬のあからむほど嬉しくなつた。兄に肩をたたいて貰つたのが有難かつたのだ。いつもせめて、これぐらゐにでも打ち解けて呉れるといいが、と果敢はかなくも願ふのだつた。

訪ねる人は不在であつた。

兄はかう言つた。「小説を、くだらないとは思はぬ。おれには、ただ少しまだるつこいだけである。たつた一行の眞實を言ひたいばかりに百頁の雰圍氣をこしらえてゐる。」私は言ひ憎さうに、考へ考へしながら答へた。「ほんとうに、言葉は短いほどよい。それだけで、信じさせることができるならば。」

また兄は、自殺をいい氣なものとして嫌つた。けれども私は、自殺を處世術みたいな打算的なものとして考へてゐた矢先であつたから、兄のこの言葉を意外に感じた。

白狀し給へ。え？ 誰の眞似なの？

水到りて渠成る。

彼は十九歳の冬、「哀蚊」といふ短篇を書いた。それは、よい作品であつた。同時に、それは彼の生涯の渾沌を解く代いな鍵となつた。形式には、「雛」の影響が認められた。けれども心は、彼のものであつた。原文のまま。

をかしな幽霊を見たことがございます。あれは、私が小學校にあがつて間もなくのことでございますから、どうせ幻燈のやうにとろんと霞んでゐるに違ひございませぬ。いいえ、でも、その青蚊帳に寫した幻燈のやうな、ぼやけた思ひ出が奇妙にも私には年一年と愈々はつきりして參るやうな氣がするのでございます。

なんでも姉様がお婿をとつて、あ、ちやうどその晩のことでございます。御祝言の晩のことでございます。藝者衆がたくさん私の家に來て居りまして、ひとりのお綺麗な半玉さんに紋附の綻びを縫つて貰つたりしましたのを覚えて居りますし、父様が離座敷の眞暗な廊下で脊のお高い藝者衆とお相撲をお取りになつてゐらつしやつたのもあの晩のことござ

いました。父様はその翌年お歿^たくなりになられ、今では私の家の客間の壁の大きな御寫眞のなかに、おはいりになつて居られるのでございますが、私はこの御寫眞を見るたびごとに、あの晩のお相撲のことを必ず思ひ出すのでございます。私の父様は、弱い人をいぢめるやうなことは決してなさらないお方でございましたから、あのお相撲も、きつと藝者衆が何かひどくいけないうことをなしたので父様はそれをお懲^{とが}しめになつてゐらつしやつたのでございませう。

それやこれやと思ひ合せて見ますと、確かにあれは御祝言の晩に違ひございませぬ。ほんとうに申し譯がございませぬけれど、なにもかも、まるで、青蚊帳の幻燈のやうな、そのやうな有様でございますから、どうで御満足に行かれますやうお話ができかねるのでございます。でもなく夢物語、いいえ、でも、あの晩に哀蚊の話聞かせて下さつたときの婆様の御めめと、それから、幽霊、とだけは、あれだけは、どなたがなんと仰言つたとて決して決して夢ではございませぬ。夢だなどとおろかなこと、もうこれ、こんなにまさまざ眼先に浮んで参つたではございせんか。あの婆様の御めめと、それから。

さやうでございます。私の婆様ほど美しい婆様もそんなにあるものではございませぬ。昨年の夏お歿^たくなりになられましたけれど、その御死顔と言つたら、すごいほど美しいとはあれでございませう。白蠟の御兩頬には、あの夏木立の影も映らむばかりでございました。そんなにお美しくてゐらつしやるのに、縁遠くて、一生鑑^{かん}装^{さう}をお付けせずにお暮しなされたのでございます。

「わしといふ萬年白齒を餌にして、この百萬の身代ができたのぢやぞえ。」

富本でこなれた澁い聲で御生前よくかう言ひ言ひして居られましたから、いづれこれには面白い因縁でもあるのでございませう。どんな因縁なのだらうなどと野暮なお探りはお止しなさいませ。婆様がお泣きなさるでございませう。と申しますのは、私の婆様は、それはそれは粹なお方で、ついに一度も縮緬の縫紋の御羽織をお離しになつたことがございませんでした。お師匠をお部屋へお呼びなされて富本のお稽古をお始めになられたのも、よほど昔からのこととございましたでせう。私なども物心地が附いてからは、日がな一日、婆様の老松^{おまつ}やら浅間^{あま}やらの咽び泣くやうな哀調のなかにうつとり

してゐるときがままございました程で、世間様から隠居藝者とはやされ、婆様御自身もそれをお耳にしては美しくお笑ひになつて居られたやうでございました。いかなることか、私は幼いときからこの婆様が大好きで、乳母から離れるとすぐ婆様の御懷に飛び込んでしまつたのでございます。もつとも私の母様は御病身でございました故、子供には餘り構うて呉れなかつたのでございます。父様も母様も婆様のほんとうの御子ではございませぬから、婆様はあまり母様のほうへお遊びに参りませず四六時中、離座敷のお部屋にはかりゐらつしやいますので、私も婆様のお傍にくついで三日も四日も母様のお顔を見ないことは珍らしいでございせんでした。それゆゑ婆様も、私の姉様などよりずっと私のほうを可愛がつて下さいまして、毎晩のやうに草双紙を読んで聞かせて下さつたのでございます。なかに、あれあの八百屋お七の物語を聞いたときの感激は私は今でもしみじみ味ふことができますのでございます。そしてまた、婆様がおたわむれに私を「吉三」「吉三」とお呼びになつて下さつた折のその嬉しさ。らむぶの黄色い燈火ともかの下でしよんぼり草双紙をお読みになつてゐらつしやる婆様のお美しい御姿、左様、私はことごとくよく覚えてゐるのでございます。

とりわけあの晩の哀蚊の御寝物語は、不思議と私には忘れることができないのでございます。さう言へばあれは確かに秋でございました。

「秋まで生き残されてゐる蚊を哀蚊と言ふのぢや。蚊燻しは焚かぬもの。不憫の故にな。」

ああ、一言一句そのまんま私は記憶して居ります。婆様は寝ながら滅入るやうな口調でさう語られ、さうさう、婆様は私を抱いてお寝になられるときには、きまつて私の兩足を婆様のお脚のあひだに挟んで、温めて下さつたものでございます。或る寒い晩など、婆様は私の寢巻をみんなお剝ぎとりになつておしまひになり、婆様御自身も輝くほどお綺麗な御素肌をおむきだし下さつて、私を抱いてお寝になりお温めなされてくれたこともございました。それほど婆様は私を大切にしておつしやつたのでございます。

「なんの。哀蚊はわしぢやがな。はかない……」

仰言りながら私の顔をつくづくと見まもらしましたけれど、あんなにお美しい御めめもないものでございます。母屋おとやの御

祝言の騒ぎも、もうひとつそり靜かになつてゐたやうでございましたし、なんでも眞夜中かくでございましたでせう。秋風がさらさらと雨戸を撫でて、軒の風鈴がその度毎に弱弱しく鳴つて居りましたのも幽かに思ひだすことができるのでございます。ええ、幽霊を見たのはその夜のことでございます。ふつと眼をさましまして、おしつこ、と私は申しましたのでございます。婆様の御返事がございませんでしたので、寢ぼけながらあたりを見廻しましたけれど、婆様はゐらつしやらなかつたのでございます。心細く感じながらも、ひとりでそつと床から脱け出しまして、てらてら黒光りする樺普請の長い廊下をこはごはお厠のはうへ、足の裏だけは、いやに冷や冷やして居りましたけれど、なにさま眠くつて、まるで深い霧のなかをゆらりゆらり泳いでゐるやうな氣持ち、そのときです。幽霊を見たのでございます。長い長い廊下の片隅に、白くしよんぼり蹲くまつて、かなり遠くから見たのでございますから、ふゐるむのやうに小さく、けれども確かに、確かに、姉様と今晚の御婿様とがお寢になつて居られるお部屋を覗いてゐるのでございます。幽霊、いいえ、夢ではございませんぬ。

藝術の美は所詮、市民への奉仕の美である。

花きちがひの大工がある。邪魔だ。

それから、まち子は眼を伏せてこんなことを囁いた。

「あの花の名を知つてゐる？ 指をふればばちんとわれて、きたない汁をはじきだし、みるみる指を腐らせる、あの花の名が判つたらねえ。」

僕はせせら笑ひ、ズボンのポケットへ両手をつつ込んでから答へた。

「こんな樹の名を知つてゐる？ その葉は散るまで青いのだ。葉の裏だけがぢりぢり枯れて蟲に食はれてゐるのだが、そ

れをこつそりかくして置いて、散るまで青いふりをする。あの樹の名さへ判つたらねえ。」

八

「死ぬ？死ぬのか君は？」

ほんとうに死ぬかも知れないと小早川は思つた。去年の秋だつたかしら、なんでも青井の家に小作爭議が起つたりしていろいろのごたごたが青井の一人に振りかかつたらしいけれど、そのときも彼は薬品の自殺を企て三日も昏睡し續けたことさへあつたのだ。またついせんだつても、僕がこんなに放蕩をやめないのもつまりは僕の身體がまだ放蕩に堪え得るからであらう。去勢されたやうな男にでもなれば僕は始めて一切の感覺的快樂をさせて、闘争への財政的扶助に専心できるのだ、と考へて、三日ばかり續けてP市の病院に通ひ、その傳染病舎の傍の泥溝の水を掬つて飲んだものださうだ。けれどもちよつと下痢をしただけで失敗さ、とそのことを後で青井が頬あからめて話すのを聞き、小早川は、そのインテリ臭い遊戲をこのうへなく不愉快に感じたが、しかし、それほどまでに思ひつめた青井の心が、少からず彼の胸を打つたのも事實であつた。

「死ぬが一番いいのだ。いや、僕だけぢやない。少くとも社會の進歩にマイナスの働きをなしてゐる奴等は全部、死ぬばいいのだ。それとも君、マイナスの者でもなんでも人はすべて死んではならぬといふ科學的な何か理由があるのかね。」

「ば、ばかな。」

小早川には青井の言ふことが急にばからしくなつて來た。

「笑つてはいけない。だつて君、さうぢやないか。祖先を祭るために生きてゐなければならぬとか、人類の文化を完成させなければならぬとか、そんなたいへんな倫理的な義務としてしか僕たちは今まで教へられてゐないのだ。なんの科學的な説明も與へられてゐないのだ。そんな僕たちマイナスの人間は皆、死んだほうがいいのだ。死ぬとゼロだよ。」

「馬鹿！何を言つてゐやがる。どだい、君、虫が好すぎるぞ。それは成る程、君も僕もぜんぜん生産にあづかつてゐない人間だ。それだからとて、決してマイナスの生活はしてゐないと思ふのだ。君はいつたい、無産階級の解放を望んでゐる

のか。無産階級の大勝利を信じてゐるのか。程度の差はあるけれども、僕たちはブルジョアジイに寄生してゐる。それは確かだ。だがそれはブルジョアジイを支持してゐるのとはぜんぜん意味が違ふのだ。一のプロレタリアートへの貢献と、九のブルジョアジイへの貢献と君は言つたが、何を指してブルジョアジイへの貢献と言ふのだらう。わざわざ資本家の懐を肥してやる點では、僕たちだつてプロレタリアートだつて同じことなんだ。資本主義的經濟社會に住んでゐることが裏切りなら、闘士にはどんな仙人が成るのだ。そんな言葉こそウルトラといふものだ。小兒^{キデックラシバイト}病といふものだ。一のプロレタリアートへの貢献、それで澤山。その一が尊いのだ。その一だけの爲に僕たちは頑張つて生きてゐなければならぬのだ。さうしてそれが立派にプラスの生活だ。死ぬなんて馬鹿だ。死ぬなんて馬鹿だ。」

生れてはじめて算術の教科書を手にした。小型の、まづくろい表紙。ああ、なかの數字の羅列がどんなに美しく眼にしてみたことか。少年は、しばらくそれをいちくつてゐたが、やがて、卷末のペエジにすべての解答が記されてゐるのを發見した。少年は眉をひそめて呟いたのである。「無禮だなあ。」

外はみぞれ、何を笑ふやレニン像。

叔母の言ふ。

「お前はきりやうがわるいから、愛嬌だけでもよくなさい。お前はからだだが弱いから、心だけでもよくなさい。お前は嘘がうまいから、行ひだけでもよくなさい。」

知つてゐながらその告白を強ひる。なんといふいんげんな刑罰であらう。

満月の宵。光つては崩れ、うねつては崩れ、逆巻き、のた打つ浪のなかで互ひに離れまいとつないだ手を苦しまぎれに俺が故意と振り切つたとき女は忽ち浪に吞まれて、たかく名を呼んだ。俺の名ではなかつた。

われは山賊。うぬが誇をかすめとらむ。

「よもやそんなことはあるまい、あるまいけれど、な、わしの銅像をたてるとき、右の足を半歩だけ前へだし、ゆつたりとそりみにして、左の手はチョッキの中へ、右の手は書き損じの原稿をにぎりつぶし、さうして首をつけぬこと。いやいや、なんの意味もない。雀の糞を鼻のあたりに浴びるなど、わしはいやなのだ。さうして臺石には、かう刻んでおくれ。ここに男がゐる。生れて、死んだ。一生を、書き損じの原稿を破ることに使つた。」

メフィストフェレスは雪のやうに降りしきる薔薇の花弁に胸を頬を掌を焼きこがされて往生したと書かれてある。

留置場で五六日を過して、或る日の眞晝、俺はその留置場の窓から脊のびして外を覗くと、中庭は小春の日ざしを一杯に受けて、窓ちかくの三本の梨の木はいづれもほつほつと花をひらき、そのしたで巡査が二三十人して教練をやらされてゐた。わかい巡査部長の號令に従つて、皆はいつせいに腰から捕縄を出したり、呼笛を吹きならしたりするのであつた。俺はその風景を眺め、巡査ひとりひとりの家について考へた。

私たちは山の温泉場であてのない祝言をした。母はしじゅうくつくつと笑つてゐた。宿の女中の髪のかたちが奇妙であるから笑ふのだと母は辯明した。嬉しかつたのであらう。無學の母は、私たちを爐ばたに呼びよせ、教訓した。お前は十六魂^{たまし}だから、と言ひかけて、自信を失つたのであらう、もつと無學の花嫁の顔を覗き、のう、さうでせんか、と同意を求

めた。母の言葉は、あたつてゐたのに。

妻の教育に、まる三年を費やした。教育、成つたところより、彼は死なうと思ひはじめた。

病む妻や とどこほる雲 鬼すすき。

赤え赤え煙こゑ、もくらもくらと蛇體みたいに天さのぼつての、ふくれた、ゆららと流れた、のつそらと大浪うつた。ぐるつぐるつと渦まえた、間もなくし、火の手あ、のののと荒けなくなり、地ひびきたてた山ばのぼり始めたずおん。山あ、てつべらまで、まんどろに明るくなつたずおん。どうどうと燃えあがる千本萬本の冬木立は縫ひ、人を乗せたまつくろい馬こゑ、風みたいに馳せてゐたずおん。（ふるさとの言葉で。）

たつた一言知らせて呉れ！ “Nevermore”

空の蒼く晴れた日ならば、ねこはどこからかやつて来て、庭の山茶花のしたで居眠りしてゐる。洋畫をかいてゐる友人は、ベルシヤでないか、と私に聞いた。私は、すてねこだらう、と答へて置いた。ねこは誰にもなつかかなかつた。ある日、私が朝食の鯛を焼いてゐたら、庭のねこがものうげに泣いた。私も縁側へでて、にやあ、と言つた。ねこは起きあがり、静かに私のはうへ歩いて來た。私は鯛を一尾なげてやつた。ねこは逃げ腰をつかひながらもたべたのだ。私の胸は浪うつた。わが戀は容れられたり。ねこの白い毛を撫でたく思ひ、庭へおりた。脊中の毛にふれるや、ねこは、私の小指の腹を骨までかりりと噛み裂いた。

役者になりたい。

むかしの日本橋は、長さが三十七間四尺五寸あつたのであるが、いまは廿七間しかない。それだけ川幅がせまくなつたものと思はねばいけない。このやうに昔は、川と言はず人間と言はず、いまよりはるかに大きかつたのである。

この橋は、おほむかしの慶長七年に始めて架けられて、そのちまたびばかり作り變へられ、今は明治四十四年に落成したものである。大正十二年の震災のときは、橋のらんかんに飾られてある青銅の龍の翼が、焰に包まれてまづかに焼けた。

私の幼時に愛した木版の東海道五十三次道中双六では、ここが振りだしになつてゐて、幾人ものやつこのそれぞれ長い槍を持つてこの橋のうへを歩いてゐる畫が、のどかにかかれてあつた。もとはこんなぐあひに繁華であつたのであらうが、いまは、たいへんさびれてしまつた。魚河岸が築地へうつつてからは、いつさう名前もすたれて、げんさいは、たいていの東京名所繪葉書から取除かれてゐる。

ことし、十二月下旬の或る霧のふかい夜に、この橋のたもとで異人の女の子がたくさんの乞食の群からひとり離れて佇んでゐた。花を賣つてゐたのは此の女の子である。

三日ほどまへから、黄昏どきになると一束の花を持つてここへ電車でやつて來て、東京市の丸い紋章にじやれついでゐる青銅の唐獅子の下で、三四時間ぐらゐ黙つて立つてゐるのである。

日本のひとは、おちぶれた異人を見ると、きつと白系の露西亞人にきめてしまふ憎い習性を持つてゐる。いま、この濃霧のなかで手袋のやぶれを氣にしながら花束を持つて立つてゐる小さい子供を見ても、おほかたの日本のひとは、ああロシヤがある、と樂な氣持で呟くにちがひない、しかも、チエホフを讀んだことのある青年ならば、父は退職の陸軍二等大尉、母は傲慢な貴族、とうつとりと獨斷しながら、すこし歩をゆるめるであらう。また、ドストエーフスキイを覗きはじめた學生ならば、おや、ネルリーと聲を出して叫んで、あわてて外套の襟を搔きたてるかも知れない。けれども、それだ